

熊本県上映のご案内

上映運動のすすめ方

開催方法

上映を主催する主催者を立ち上げていただきます。
単一の団体でも、賛同の方が手をつないだ実行委員会でも結構です。
「観せたい!」この一点での主催者になってください。

会場・日時

会場はそれぞれの公共の施設を使います。
上映は一般的には、1日2～3回の上映を行います。

入場料

前売券	一般・シニア・大学生	1,300円
当日券	一般・シニア・大学生	1,500円
	小中高生	800円

映画教室

学校での映画教室は以下のご鑑賞料です。

小学生 1 人	600円
中学生 1 人	700円
高校生 1 人	800円

上映經費

上映にかかる一切の経費は、上映をすすめる会事務局が負担します。

觀客目標

上映運動のスタートにあたっては、ご相談の上、観客目標を設定します。
しかし、上映結果が目標に届かなくても、主催者が不足分を
ご負担することはありません。

上映協力金

上映終了後、上映総収入の10%は上映主催者にお支払いします。
この使途は主催者側でお決め下さい。

映画「ぼくが生きてる、ふたつの世界」熊本上映をすすめる会

事務局

一般財団法人 熊本県ろう者福祉協会
熊本市中央区水前寺6丁目9番4号 熊本聴覚障害者総合福祉センター
FAX 096-384-5937 TEL 096-383-5587

映画「ぼくが生きてる、ふたつの世界」南九州配給委員会
〒880-1302 宮崎県東諸県綾町大字北俣1624-1
TEL 0985-77-8885 FAX 0985-77-8900
熊本担当(永田) TEL 090-7397-0601



映画 ぼくが生きてる、 ふたつの世界

熊本県内上映にあなたの力をお貸ください



木村 敬(熊本県知事)

この映画は、耳の聴こえない両親と聴こえる息子が愛情を紡ぐ物語ですが、そこには普遍的な家族の愛の物語が描かれており、改めて家族というものを考えさせられます。

この映画が、聴こえる、聴こえないに関係なく、更には障がいの有無に関係なく、子育てをしたいと願う方々や子どもたちが、家族として愛を紡いでいける社会づくりが進む契機となることを願っています。

また、この映画には、聴こえない人の世界と聴こえる人の世界のふたつの世界がある中で、どちらの世界も存在して当たり前であってほしいという願いが感じられます。私自身、障がいを持って生まれたこともあり、この映画をきっかけに、手話の普及も含め、障がいのある人もない人も共に生きる社会づくりが進むことを願っています。

後援団体

熊本県教育委員会
熊本県市長会
熊本県町村会
社会福祉法人熊本県社会福祉協議会
社会福祉法人熊本県身体障害者福祉団体連合会
熊本県手話サークルわかぎ

熊本県手話通訳問題研究会
パソコン文字通訳グループ「らん」
要約筆記サークル「ひまわり」
NPO法人熊本県難聴者中途失聴者協会
熊本盲ろう者夢の会

わたしも賛同・応援しています！

齋藤 陽道

写真家。著書に『異なり記念日』『よっちぼっち』などがあります。映画製作では、ポスター写真撮影を担当されました。2020年から熊本県に在住中です。



五十嵐大著
『ろうの両親から生まれたぼくが聴こえる世界と聴こえない世界を行き来して考えた30のこと』が映画の原作です。
この本の書影も齋藤陽道さんの写真にてデザインされています。



(一財)熊本県ろう者福祉協会
代表理事 松本幸造

ふたつの世界を、誰もが生きやすい社会について考えてほしい

この映画では、ろう者の両親から愛情を受けて育ち、手話言語でろう者が生きる「聴こえない世界」と音声言語で聞こえる者が生きる「聴こえる世界」を行き来してきたきこえる息子が様々な感情と葛藤を抱えながらも向き合っていく様子が描かれています。言語が違っていても、障がいがある人もない人も家族への愛情は皆、変わりありません。

熊本県は「熊本県手話言語の普及及び障害の特性に応じた意思疎通手段の利用の促進に関する条例」が2022年に施行しています。また、2029年は「第77回全国ろうあ者大会」が熊本市にて開催されます。多くの手話・要約筆記ボランティアを必要としています。この映画を通してきこえる人、きこえない人、障がいのある人もない人も共に生やすい社会について改めて考えていただければ幸いです。



■助成:文化庁文化芸術振興費補助金(映画創造活動支援事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

■厚生労働省推薦作品



忍足 亜希子



母と息子、切なくも心に響く家族の物語

Story

宮城県の小さな港町、五十嵐家に男の子が生まれた。祖父母、両親は、「大」と名付けて誕生を喜ぶ。ほかの家庭と少しだけ違っていたのは、両親の耳がきこえないこと。幼い大に

としては、大好きな母の「通訳」をすることも「ふつう」の楽しい日常だった。しかし次第に、周りから特別視されることに戸惑い、苛立ち、母の明るささえ疎ましくなる。心を持て余したまま20歳になり、逃げるように東京へ旅立つ大だったが・・・。

